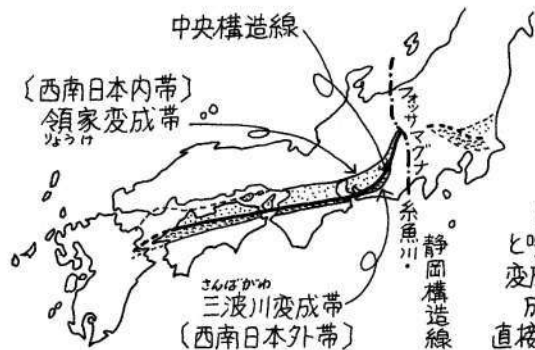
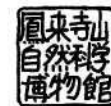


# 新城市の中央構造線 博物館ザッ記 No.28 2022.I



中央構造線は、関東から九州まで続く、約1000kmにわたる日本最長の断層です。長野県の諏訪湖付近から南下し、新城市のあたりで屈曲して紀伊半島から四国、九州に至ります。

中央構造線を境に北側を西南日本内帯(内帯) 南側を西南日本外帯(外帯)と呼んで区別しています。

内帯側の地質は中生代のジュラ紀に形成された付加体が白亜紀に高温低圧型の変成を受けたもので、領家変成帯と呼ばれています。外帯側はジュラ紀の付加体が低温高圧型の変成を受けたもので、三波川変成帯と呼びます。

成因が大きく異なる変成岩が中央構造線を境に直接接しています。(ザッ記No.19を参照してネ)

新城市では、中生代に活動した領家花崗岩類と三波川結晶片岩類が接する主断層の露頭や、新生代中新世に活動した設楽層群と領家花崗岩類、三波川結晶片岩類、河内層等が接する副断層の露頭を観察できます。

